

設立 平成24年 5月15日  
開塾 平成24年 9月 8日  
発行 令和 5年12月 9日  
(127号)

# 中之島ニュース

[事務局] 〒567-0861  
茨木市東奈良2-7-10  
人間学塾・中之島  
古田修平

「さわやかに生きる」

武田敦宏 先生

(十一月度特別講義 第一講)



## ■「先祖様は全部自分の中にいる」

「先祖様のお名前を、代々遡って書いてみますと、おじいちゃん、おばあちゃん、ずっと繋がって全部自分の中にいるんだな、というのを感じます。今日は、私のご先祖様から、久治じいちゃんといちノばあちゃんの話させて下さい。」

## ■技術は誰かに使ってもらって花開く

鋸の目立て職人だった久治じいちゃん。十三歳の時に志を立て、鋸の製造販売のお店に丁稚奉公に入ります。素直・誠実・努力・調和・継続、を体現した「下座」で働く久治の姿を見ていた親方から、普通は5年以上修行しないとさせてもらえないような大切な仕事を2年目にして任せられます。普通なら妬み、やっかみがある所ですが、普段の努力を見ていた先輩達から「ああ、久治なら仕方ないな。頑張っていたからな」と言ってもらえ、「技術は盗め」と言われた時代に、一人の先輩から「分らないことがあれば何でも聞けよ。何でも教えてやっからな」と声をかけて頂き、それが久治じいちゃんの心のロウソクに灯をつけました。

そのようにして技術を磨いていたのですが、ある時事故で、久治じいちゃんは左目を失明してしまいます。片目では遠近感がなくなり、もう志を果たすことはできないと、退院の前日に親方に「辞めさせてもらいます」と言おうとした時、親方の方から「俺は片目の目立て職人なんて見たことも聞いたこともない。でも、そんな奴が世界中に一人くらいいても面白い。やってみるか。」と言われます。また一から下座の努力を続け、二十六歳の時に「中屋久治郎」の屋号を頂き独立しますが、片目の目立て職人の所には、全く客はやってきません。そんな中、地域で三本の指に入

るような大工の親方に鋸の目立てを頼まれたお弟子さんが、引き受け手がなくて、おじいちゃん、おばあちゃんに頼みに入ります。仕上がった鋸を親方が試し切りした瞬間、皆が驚く大きな声で「この鋸の目立てをしたのは誰だ!」と叫びます。「これから鋸の目立ては全て中屋久治郎商店に出せ。今までの鋸はいらない。」一流が一流を知った瞬間でした。

その後、仕事がどんどん来るようになります。おじいちゃんがお弟子さんを育てる番になった時、「世間様では十年かかると言うが、俺はお前を三年で育ててやるからな。分からないことがあつたら何でも聞け。全部教えてやっから。」そのようにして生涯に五十人以上のお弟子さんを育てました。失明の後、仕事ができなくなつた時、逆転の発想で「天が時間を与えてくれた」と、どうやったらよい鋸の目立てができるのか、大学ノート何十冊になる程、徹底的に研究したそうです。その時の秘中の秘の技術も全てお弟子さんに伝え、「技術は墓場に持つていっても何にもならねえ。技術は誰かに使ってもらって初めて花開くんだ。お前ら、頼むぜ。」と言つたそうです。

## ■目が見えなくなつて、人の心が見えるようになった

夫婦で床屋をやつていたいちノばあちゃんの話。おばあちゃんは話聞き上手な人で、いつも仕事をしながらお客さんの話を聞いていました。糖尿病でだんだん目が見えなくなつて行く中、家の中の地図を頭の中に入れ、仕事を息子夫婦に譲つた後も、お客さんにお茶を入れて話を聞いていました。ある時、一人のお客さんが、「おばあちゃんに髭を剃つてもらつていた時はよかつたな」と言つたところ「やらせてもらいますよ」と、目が見えなくなつてからも手入れを続けていた道具を取り出し、まるで目が見えるかのように髭剃りをしたのです。長年の技術が再び花開いた瞬間でした。それで以降、毎月一回、そのお客さんが来た時に現役に戻つたのです。その時のおばあちゃんの嬉しそうな顔が今でも忘れられません。私は、おばあちゃんとよく散歩に行きましたが、ある時、「目が見えなくなつ

てよかったことあるかい?」と聞いてしまったことがあります。その時のおばあちゃんの答え「一人の心が見えるようになったな」は、いつまでも心に残っています。

## ■「しらす」の心(山中隆雄先生の資料より)

古事記(ふることふみ)の国譲りの所に「うしはく」で統治した国を「しらす」で治めるのだから譲るように「とあつた。」「しらす」は民のことを理解して治めること。聖武天皇は民の幸を願って大仏を建立し、順徳天皇は最初に神を祭り民の幸を祈願と「禁秘抄」にある。一二代天皇の孝明天皇の「ねがわくは 朝な朝なのことのをは あはれみうけよ 神ならば神」など、いたる所で朝ごとに民の平安を神に祈つておられるなど、その御心は御製にも拝することが出来ます。戦後も昭和天皇が「我が庭の 宮居に祭る 神々に 世の平らぎをいのる朝々」と、その御心が示されています。

ここで、昭和天皇がマッカーサー元帥を訪ねた際の話を見せて下さい。どこの国も同じで、トップが来るのは自分の命乞いに違いない、そうマッカーサー元帥は思ったのですが、昭和天皇は違つたのです。「先の戦争の責任は全て私にある。わが国には戦犯というものはない一人もおりません。私は貴国の法律に基づいてどんな刑罰を受けても構いません。ただし、国民はこの戦時で飢えております。着るものもありません。国民の飢えを救つていただくませんか。マッカーサー元帥は、その姿があまりにも美しく、「生きるキリストを見た」と言つたそうです。昭和六十三年暮、宮内庁長官に対する重篤な状態にあられた陛下のお言葉は「今年のお米は大丈夫かね」でした。なぜ陛下はお米のことを聞かれたのか。天孫降臨の際に邇邇芸命(にぎのみこと)に三種の神器と共に渡されたものが稲穂。これで国民が飢えることのないように、というのが起源です。国民が飢えていないか、というのが天皇陛下の祈りの根本なのです。

(抄録 野依佐千子)

《グループ討議 一日目 武田 数宏 先生》

◆Aグループ

- ・技より心。心は自分で鍛える。
- ・挨拶は先手必勝。二倍返し。
- ・人間力アップのハイの返事。

◆Bグループ

- ・先祖を知る。
- ・心の持ちよう。(逆転の発送)
- ・慈愛のこころ。(しらすの心)

◆Cグループ

- ・イチノおばあちゃんの生き方に感動。
- ・「しらす」の心。
- ・逆転の発想。(そごうの広告)

◆Dグループ

- ・イチノさんの生き方。
- ・「しらす」の心。
- ・逆転の見方。

◆Eグループ

- ・世直しは余直し。
- ・祈る人。慈悲の心。
- ・今年のお米は大丈夫かねっ。



《宿泊研修参加感想集》

「初禊完うするも草履行く」

嶋田 泉 世話人

伊勢神宮宿泊研修では「自分に克つ」体験ができた。

図らずも感じて動く、これが人間！！というの、五十鈴川での禊・お初の体験に、塾生は人がいい(?)方ばかりなので、色々教えてくれた。益々ビビる自分がいた。そこで聞こえてくるのは、「逃げてはいないか」

ズボンつと一気に肩まで、冷たい川の中へ！一瞬、生気を持っていかれそうになった。遥かなる虚空には龍？ お迎え？：あかん！深呼吸だ！講師・山崎さんの言葉を思い出し、気を取り直して深呼吸を始めた。ゆっくりとゆっくりと。

生気戻るも、体の震えが止まらない。「五十鈴川」の歌も何を唱えているのか。手足が麻痺してきた。

山崎さんの掛け声でようやく禊が終了。心の隙があつたのか、サンダルを掴み切れず、川の流れに持っていかれた。

体の表面は冷たいが、逆に、体内はとても温かい、命の源に感動を覚えた。

自分に克つ！ 克己復礼！ 利己に克つとシランケド 笑



伊勢研修に参加して

磯部 泰司 塾生

11月の人間学塾・中之島は、秋季宿泊研修が伊勢修養団研修センターで開催されました。私は修養団を知らず調べてビックリなんと私の故郷である福島県喜多方市出身の蓮沼門三氏が作った団体ということを知りました。

当日は東京から名古屋を経由して伊勢へ名古屋からは近鉄特急「しまかぜ」で向かい偶然にも先頭車両に乗れ、幸先の良い出発となりワクワクしながら伊勢に向かいました。昼前に着き伊勢うどんを食べ腹ごしらえ、いよいよ研修の始まりです。

冒頭で伊勢の人は伊勢にきた方への挨拶は「お帰りなさい」と挨拶をされるとおっしゃられていました。私の苗字は磯部、伊勢の先には磯部という土地があります。昔祖父がご先祖様は三重から来たと言っていたのを思い出しました。

研修の始まりまずは礼法・作法・受講心得を学び、童心行で体を動かし、武田所長の講話では人間力向上・伊勢について学びました。そして夜、灯火の集いで、親・祖父母を思い出し涙がぼろり改めて孝行をしなくては思いになりなりました。いよいよ水行へ五十鈴川に入った瞬間、足は進まない、体の芯からの震え、自分の心の弱さを身をもって知るよい機会になりました。

2日目はまず伊勢神宮参拝でお礼と祈りを捧げ、斎藤先生の講話は、学ぶとこがいつぱいでした。話しが終わり私は志が大切でこの志が行動に変わった時に自身が変わりすべてが変わっていくのだと思いました。最後に、「いつてらっしゃい」と見送られ研修が終わりました。私自身は、研修を終え「一隅を照らす」人間になることを決意しました。研修所を後にしました。

今回研修の機会を頂き、修養団の皆様、講師の皆様、人間学塾の皆様・世話人の皆様、また家族・社員にお礼を申し上げます。「ありがとうございました。」



「夢がくれた新たな夢」

齋藤 学 先生

(十一月度特別講義 第一講)



## ■かけがえない師との出会い

医者は小学一年生からの夢でした。医学部を目指し進学、卒業して晴れて医者になりました。最初は地元の大きい病院に入った。ここでは忙しくもろろ大変勉強にはなつたのですが、将来この院長になって引き継げと言われて窮屈になってしまった。二〇代半ばのことです。その後雑誌で見つけたのちに終生の師匠となる沖縄の井上徹英先生を訪ねて浦添総合病院を選びました。井上先生は「人を救うヘリが飛ばないとは何事か」と離島医療に情熱を持たれていました(後にドクターヘリ運用の民間病院の先駆けとなる)。

ドクターコトーのモデルとなった瀬戸上健二郎先生との出逢いは、この病院での講演でした。なんとその時、僕が先生の代診を頼まれたのです。先生とは半日一緒に働いたのですが、それがすごかった。若い女性が甲状腺のしこりで来られたので、僕は丁寧に診察し「たぶん癌じゃないから安心してください、専門の病院へ行くように」と伝え、手紙も書いた。ところが奥から先生がやってきて、針で患者のしこりを刺して「癌じゃないわ」と伝えたうえに、血液をプレートにとつて、看護師に船で送るよう伝えられました。僕は患者さんを船で送るところを、先生はガラス板一枚送るだけで済ませてしまう。医者一人の力でこんなに医療が変わってしまうのかと実感した瞬間でした。

## ■僻地医療の難しさ

離島僻地での医療はまさに「メジャーリーグ」、瀬戸上先生との体験からも口が裂けても離島医療に携わりたいなど言えないと思つたのですが、医者になって十年目に徳之島へと行きました。ある時夜中の十一時に脳出血の患者さんが来られた。呼吸も止まりそう、瞳孔も開いてくる。助けるには脳の手術しかないが、脳外科はないので、外科の院長と僕とで頭に穴を開け手術するしかない。当時テレビ電話はなく、ファクスのやり取りを見ながらやるのです。そのうち自衛隊のヘリが到着しました。徳之島ではその少し前にヘリの墜落事故があつたこともあり、島民は島内で医療を受けたいと思つています。また本来自衛隊ヘリは災害救助のためであり、救急搬送用ではないのです。

その後、井上先生の元で再研修し、先生は北九州でドクターヘリを立ち上げ、またドクタージェットの立ち上げに取り組んでおられました。そのうち、東北大震災があり、このドクタージェットが大活躍しました。

## ■プロとは

夢を叶えて医者になつたはずなのに鬱状態の時期も体験し、また新たに歩みだそうとするとき、大学の恩師にこう言われました。「新しいこと始めるときは川を上りなさい、海を渡りなさい」。川を上るとは歴史を遡る、海を渡るとは海外を見れば必ず同じ課題がある、ということ。

その後、僻地医療の先進国であるオーストラリアの離島のクリニックなど訪ねました。そこにはドクターコトーのような先生がたくさんおられるのです。彼らは自国の離島だけでなく、その周辺の他国の離島までサポートするのです。オーストラリアの僻地に行く医者を育てるジェームススクッ

ク大学の医学部長から「物事を成し遂げるときは、二年間で終わらせよ」と言われました。この二年間という数字は後々自分にとって大きなものになりました。先人のやり方を完全にコピーしたらよい、というアドバイスも得て取り組んだのが二〇一七年のこと。離島・僻地で取り組む医師育成のためのプログラム「日本版離島僻地プログラム(RGP)」を立ち上げました。ここでは、離島僻地での①医者になりたい②医者を育成したい③すでに戦っている医者を支えたい。その三本柱です。今立ち上げから7年が過ぎ60人が卒業し全国9か所に医者を派遣することができました。

二〇二〇年ドクターコトー二代目の先生が引退されることとなり、僕に引き継ぎの話がありました。当時同居している妻の両親は共に重篤な状態でしたが、妻は一言「行くしかないでしょ!」。大きな決断をし、島に一つしかない診療所で三年間務めました。

プロとは、いつでもどこでも誰とでも同じクオリティの仕事ができることだと教えてもらいました。その意味で松井・イチロー・大谷、日本の四番バッターは皆プロです。これから僕は故郷にもどりプライマリーケアに尽くしていこうと思つています。瀬戸上先生はある賞の授賞式においてこう言われました。「医者として一番嬉しいことは医者としての技術が上がること。それが結果として地域住民のためになればこんなにうれしいことはありません」。

人のために、患者のためというのは簡単です。しかし自分の技術を磨き続ける喜び、それがひいては人々の喜びになる、これこそが一流であり続けるための方法だと思います。

(抄録 中川千都子)

# 《グループ討議 二日目 齋藤学先生》

## ◆Aグループ

- ・ 新たなことを始めるとき、川をのぼること。海を渡ること。

・ 価値観をみつけたとき、行動できる。

・ やりたいことをやり続ける。

- ・ 来た球すべてがストライク。

## ◆Bグループ

- ・ 医者として一番嬉しいのは、医者としての技術が上がること。

・ 新しいことを始めるときは、川をのぼりなさい。海を渡りなさい。

- ・ プロとはどこへ行っても同じクオリティで仕事ができること。

## ◆Cグループ

- ・ いつでも誰とでも同じクオリティで仕事ができることがプロ。

・ 根拠のない数字でも実践者の言葉は説得力がある。

・ いくつになっても自分の技術を磨く。それが地域のためになることが喜び。

## ◆Dグループ

- ・ プロとはいってもどこでも同じパフォーマンスの仕事ができること。

・ 新しいことをするには、川をのぼり、海を渡る。

- ・ 技術が上がるのが医者として嬉しい。

## ◆Eグループ

- ・ 新しいことをする時は、歴史と海外を参考にする。広い視野を持つ。

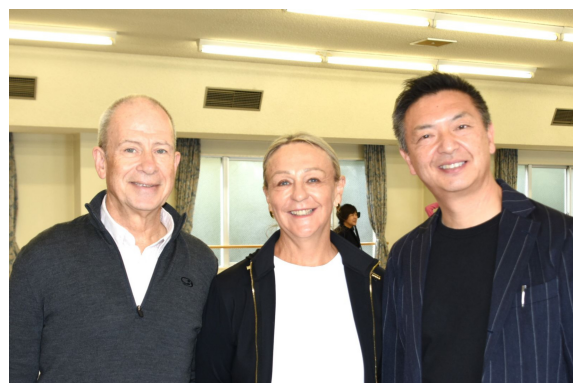
・ 小学生の頃の夢を叶えたことが素晴らしい。

- ・ プロは場所が変わってもできる。



武田 数宏 先生 ご講演 ありがとうございます。

## 秋季宿泊研修 於伊勢修養団



「齋藤学先生 そしてオーストラリアから来られた僻地医療に取り組むドクターお二人」





童心行で童心に！

山崎 政弘 先生 今年もありがとうございます！

さあ！イザ 水行へ！予行演習！



武田 数宏 先生 懇親会まで！



《人間学塾・中之島》次月日程



【1月日程】

日程 令和6年

1月13日(土曜) 午後1時～

会場

大阪大学・中之島センター6階 E F

講師

木南一志 先生

「志は師によって立つ」

塾生講話 復活！

人間学塾・中之島では、先師や講師先生に学ぶだけでなく、塾生の方からもお互い学びあいます。一月は、原周作塾生・川村さゆり塾生からご講話いただきます。



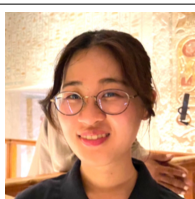
原 周作塾生



川村さゆり塾生

塾生紹介

新規塾生



藤井 優和  
先生方の講演や皆様との交流を通して知見を深め、視野を広げたいと思っております。

新規塾生



濱田 久美  
「自分もまわりも本当に幸せな調和の世界に住むことにしよう」と決めて、この度に入塾いたしました。

寺田先生に導かれて 近藤宏枝

「喜べば 喜びごとが 喜んで」

寺田一清先生がご縁を繋いで下さった忘れられないお方のお一人に、「伊勢の父」と呼ばれ、修養団・元伊勢道場長で在られた中山靖雄先生がいらっしゃいます。私が初めて中山先生とお言葉を交わしたのは、平成二十三年三月「天分塾」の伊勢一泊研修、修養団研修会場でのお出合いでした。この日の前日には「東日本大震災」が起こり、世界中の誰もが心を痛めていて、私達が伊勢で祈る機会を頂いた必然を深く噛み締めていました。この頃には中山先生はお目をご不自由で、奥様の緑様がいつも寄り添われていました。

私はそれ以前に先生のお姿に触れるだけで、涙する方々を拝見していて、その意味を知りたいとずっと思っていました。けれども先生のお近くには、いつも誰かがお声を掛けられていて、そばにお寄りする機会がありませんでした。でもその日はなぜか違って、眼に見えない何か働いたとしか思えない、先生のおそばから人がずっと離れていき、私は引き寄せられるように先生に近寄る事ができたのです。私を待っていて下さったことが、笑顔の「そうだね。」のお言葉から伝わってきました。詳しい会話の内容は覚えていませんが、先生に手を触れて頂くだけで慈愛に包まれていく温かさを感じ、自然に涙が溢れてきました。

四年後の平成二十七年三月、中山靖雄先生はご逝去されました。お出会いから十二年が過ぎ、今も奥様の緑様とご縁を紡いでいます。

先生は、やりとりの言葉をたくさん教えて下さいました。「喜べば 喜びごとが 喜んで 喜び集めて 喜びにくる」この言葉を心に刻んで、生きていきたいと念(おも)っています。

編集後記

「流汗鍛錬」 「五十鈴川 清き流れの

すえ汲みて 心を洗へ 秋津島人」まだ水行の余韻が残っていますが、すっかり世間の垢にまみれて、穢れてしまい：

伊勢宿泊研修はいかがでしたか。参加できなかった方も少しでも雰囲気味わって頂きたく今号はページ増としました。

初参加の方、嶋田泉世話人、磯部泰司塾生に感想を書いて頂きました。お二人とも水行も初めて：伊勢参拝やすばらしいお二人のご講演もよかったですね。

近藤宏枝世話人のエッセイも伊勢の父中山靖雄先生の原稿！いつもありがとうございます。

編集長 西村俊幸

お願い

- ①中之島ニュースは塾生・登録塾生の方用に作成しております。事務局・編集部は無断で転載や特にコピーなどを配布することは、ご遠慮ください。よろしくお願いいたします。
- ②編集部アドレスは下記のとおりです。事務局とは異なります！感想文・文集・投稿等はこちらに↓お願いいたします！  
[2012nakanoshima@gmail.com](mailto:2012nakanoshima@gmail.com)